

昔むかし、ごろごろ川の谷間に、ひとりの鍛冶屋がいました。鍛冶屋は、年をとると、「ひとつ、これから旅に出よう」と考えました。そして、ふくろにパンを入れて背負い、うちを出ました。

しばらく行くと、あわれなようすのおじいさんに会いました。おじいさんは、

「腹がへつてたまらないんだが、何も食べる物がないんだ」といいました。ごろごろ川の鍛冶屋は、

「それは、お気の毒なこった。だが、わたし何も持っていないだよ」といって、歩いていきました。けれども、すぐに、背中の中に入っていたパンが残っていたのを思い出して、

「おーい。じいさんよ。まだパンが残ってたよ。よかったら、やるよ」と、どなりました。じいさんは、

「はいはい」と返事して、鍛冶屋のところまで来ると、

「ありがたいことで。ぜひともお恵みくださいまし」といって、パンを受け取りました。そして、

「あんたは、えらく親切なただから、お札に何かさしあげましょう。負けを知らないカードか、いつも歌っている鳥か、それとも背負いぶくろか。この背負いぶくろは、だれかをつかまえたいとき、『おれのふくろの中に進め』っていうと、そいつは、もうふくろの中に入ってるんですよ」といいました。

「じゃあ、その背負いぶくろをもらうよ」と、鍛冶屋はいいました。

鍛冶屋は、背負いぶくろをもらって、旅をつづけました。行くうちに、目の前を、うさが走っていききました。鍛冶屋はさっそく試してみました。

「おれのふくろの中に進め！」

さけぶやいなや、もう、うさが、ふくろの中に入っていました。鍛冶屋は、すっかり気にいって、心うきうき、旅をつづけました。

夕方、ある村まで来ると、一軒の家に、黒い旗が立っていました。鍛冶屋は、そこへ行って、ひと晩泊めてもらえないかとたのみました。すると、家の人が、

「いいですよ。よろしければ泊まっていってください。でも、化け物が出る部屋しか空いていないんです。その部屋は、今までだれひとりとして、ひと晩、そこにいられたた

めしがありません。朝になると、みんな消えてるんです」といいました。鍛冶屋は、「なんの、平気さ。おれは、いてみせるよ」といいました。

鍛冶屋は、その部屋に入ると、寝ないで待っていました。真夜中になると、悪魔があらわれて、鍛冶屋をつかまえてつれて行こうとしました。鍛冶屋は、「おれのふくろの中に進め」とさけびました。そのとたん、悪魔は、鍛冶屋のふくろの中に入っていました。鍛冶屋は、ふくろをベッドの下に放りこむと、朝までぐっすり寝ました。

朝になると、家の人たちは、鍛冶屋がびんびんしているので、びっくりしました。そして、もつといてくれといって引き止めました。

つぎの晩、真夜中になると、また別の悪魔が来て、鍛冶屋をつれて行こうとしました。鍛冶屋は、すぐさま、

「おれのふくろの中に進め」とさけびました。こうして、悪魔をふたりつかまえました。三日目の晩も、真夜中になると、悪魔が来て、連れて行こうとしました。鍛冶屋は、「おれのふくろの中に進め」とさけびました。これで、ふくろの中は三人です。

さて、地獄では、出かけた悪魔が三人も帰って来ないので、兄貴分の悪魔が、ふしぎに思っ、やって来ました。ところが、そいつもふくろの中に入ってしまった。ふくろは、もうぎゅうぎゅうづめです。兄貴分の悪魔は、

「どうか、かんべんしてください」とたのみました。鍛冶屋は、

「よし、みんな許してやろう。だが、おまえの仲間たちが、もう二度とここには来ないと約束するんだ」といいました。兄貴分の悪魔は、

「はい、はい、もう決して、だれも来ません」と、大きな声で約束しました。鍛冶屋は、悪魔たちを逃がしてやりました。

鍛冶屋は、家に帰りました。しばらくすると、鍛冶屋は、「わしもそろそろ地獄って所がどこにあるか、見に行つてこなくちゃならんな」と思いました。

鍛冶屋は、仕事に使う金づちを肩にかついで、出かけました。何週間も歩いて、やっと地獄の鉄の門に着きました。鍛冶屋は、金づちで鉄の門を思い切りたたきました。中から、

「そこに来たのはだれだ」と声がしました。

「おれだよ。ごろごろ川の鍛冶屋だよ」と、返事をする、悪魔たちが大声でいいました。

「だめだめ。あんたを入れたら、おれたちみんなえらいことになる！」

悪魔たちは、そういつて鉄の門をしっかりと押さえました。鉄の門のすき間から、悪魔たちの爪が少し飛び出しました。鍛冶屋は、金づちでその爪を折り曲げました。だから、悪魔たちは、まだ離れられなかったら、今でも地獄の門にぶらさがっていますよ。

鍛冶屋は家に帰りました。何年もたつうちに、鍛冶屋は病氣になって、弱りはてて、ベッドから出られなくなりました。

あるとき、とうとう死神がやって来ました、鍛冶屋は、おかみさんに、

「うへえ、ばあさん、ちよつと、わしの背負いぶくろをよこしてくれ」といいました。

おかみさんが、ベッドの下から、背負いぶくろを取り出すと、鍛冶屋はいいました。

「おれのふくろの中に進め」

死神は、つかまってしまいました。

死神は、長いことふくろに入れられたままでした。

あるとき、ペトロスさまと悪魔が、ばつたり出会いました。悪魔がいました。

「わからんですよ。このところ、地獄に来る者がいないんですよ。どいつもこいつも天国に行っちゃもうようで」

ペトロスさまは、

「おかしいなあ。わたらの天国のほうにも、もう何年も、ひとりも来ないんだよ」といいました。

そのとき、ペトロスさまは、以前、ごろごろ川の鍛冶屋に背負いぶくろをやったことを思い出しました。そして、

「ひよつとしたら、あの中に死神をつかまえばなしにしているのかも知れない」と思いました。ペドロスさまは、鍛冶屋のうちに çık かけて行って、

「死神を放しておやり」とたのみました。鍛冶屋は承知しました。

このときからというもの、死神は、あんなにやせているのだそうです。

村上郁再話

資料『オーストリアの昔話』飯豊道男／三弥井書店